

[論文]

ミレナ・イエセンズカーがモードに託したメッセージ (1)  
 ——モード・エッセイ集『人が衣装をつくる』*Člověk dělá šaty* (1927)  
 と初出記事との比較から——

半田 幸子

## はじめに

ミレナ・イエセンズカー (Milena Jesenská, 1896-1944、以下ミレナと呼ぶ<sup>1)</sup>) は、戦間期チェコの新聞・雑誌上で活躍したジャーナリストである。これまで彼女についての研究といえば、プラハのユダヤ系ドイツ語作家、フランツ・カフカ (Franz Kafka, 1883-1924) が多くの書簡を宛てた名宛人のチェコ人女性としてその生涯に焦点を当てた伝記的な研究がほとんどであった。本稿では、そのような彼女の人物像ではなく、著作に光を当て、そこから新たなミレナ像をあぶりだすことを試みる。

ミレナは、生前、単著としては三冊の著作を出版した。一冊目はレシピ集『ミレナのレシピ集』*Mileniny Recepty* (1925) であった。これは、日刊紙『国民新聞』*Národní listy* でミレナ自身が読者に呼びかけてレシピを募り、集まったレシピを彼女が編集したものである。次に、初のエッセイ集『シンプルへの道』*Cesta k jednoduchosti* (1926) が刊行された。主に同じく『国民新聞』に掲載されたコラムの中でも生活や人生に関するものをまとめたものである。そして三冊目として、本稿で取り上げる『人が衣装をつくる』*Člověk dělá šaty* (1927) を刊行した。本書は、二冊目と同様に『国民新聞』および週刊誌『鮮やかな週』*Pestrý týden* に掲載されたなかから、服飾に関する記事をまとめた著書である。

後者二つのエッセイ集には、序文やあとがきは存在しない。そのため、ミレナがどのような考えから掲載エッセイを選択したのかについて、読者はその思いを直接知ることにはできない。また、当然初出に関しても記述されていない。

『人が衣装をつくる』に収録されているエッセイは全部で33篇ある。そのうち12篇に関しては先行研究で初出が明らかになっている<sup>2</sup>が、これまで残りの所在は明らかになっていなかった。残り21篇のうち筆者は20篇の初出記事の所在を突き止め、32篇の記事を確認することができた<sup>3</sup>。その結果、初出と収録されたエッセイとの間に多くの変更が認められた。この変更に関しては、ミレナ自身の意向がすべて反映されているかどうかは不明である。当然、編集者や校閲者による変更もあったことであろう。それらの可能性については、慎重な議論が求められ、今後の課題としていきたい。

本稿では、すべての変更がミレナ自身によるものだけではなかったであろうことを念頭に入れた上で、ミレナが服飾にまつわるエッセイ集に、どのようなメッセージを込めたのか、変更点を確認しながら考察する。そこから、モードへの思いも読み取りたい。

なお、本研究で扱うエッセイ集に収録されているエッセイで邦訳されているものはなく、また英訳されているものも一篇のみである。本邦初の扱いとなる原文を丁寧かつ詳細に考察するために、引用については原文も掲載したい。ただし、本編は33篇あるため、すべてを詳細に考察すると紙幅が限度を越えてしまう。そこで本稿では読みやすさも考慮し、33篇のうち前半15篇までの考察とする。15篇目を区切りとするのは、その前後で趣向が多少異なっているためである。前半では、具体的な服飾の題材を取り上げることなく、服飾と向き合うための心構えについて述べているのに対して、16篇目以降では、「靴」や「革製品」など具体的な服飾品をテーマとして取り上げながら、ミレナ自身の主張を述べている。そこで本稿では、一区切りのつく、前半15篇を取り上げることとした。

## 1. ミレナの略歴

ミレナの伝記はいくつか出ている<sup>4</sup>。日本語で読めるものはブーバー＝ノイマンの『カフカの恋人ミレナ』がもっとも有名であり、またミレナの生い立ちから死に至るまで概観するには、本書を読むのが一番であろう。いずれにしてもミレナの生涯は波乱に満ちていて、生涯そのものも興味深い。本稿ではしかし、ジャーナリストとしての略歴に焦点を絞ってまとめる。

ミレナのジャーナリストとしての礎になったのは、中欧初の女子ギムナジウム、ミネルヴァ (Minerva) 時代であろう。また、記者になるきっかけを与えたのは、最初の夫との不仲であった。ミネルヴァを卒業後はカレル大学医学部入学するなどエリート街道を歩んでいたが、大学入学後は父に悉く反発した。大学は中途退学し、父の反対を押し切って1918年にユダヤ系の銀行員兼文学批評家ポラック (Ernst Pollack, 1886-1947) と結婚した。その後すぐにウィーンに渡ったが、間もなくして夫は働かずにカフェに出入りするばかりとなり、二人は不仲になった。彼女のジャーナリスト人生を鑑みれば、むしろ夫との不仲が幸いしたのか、ミレナは1919年末から記者としての活動を開始した。

初めての仕事は、1919年に創刊されたばかりの『論壇』*Tribuna* (1919-1928) での翻訳であり、1919年秋ごろに始まった。その後、1922年末まで専属でモード欄を担当し、1923年からは父が愛読し、また作家である伯母が記事や小説を書いていた『国民新聞』に執筆の場を移す。『国民新聞』では1929年までモードに限らず女性向けのコラムを執筆した。1928年の出産前後から右ひざを痛め、その鎮痛剤として使用し

たモルヒネの中毒になったことから、執筆の腕にも影響を及ぼし、1929年3月末に『国民新聞』を解雇された。その翌月からは、かつての同僚を頼って『人民新聞』*Lidové noviny* (1893-1952, 1989-) でモード欄を担当するが、過去の記事にアイデアを求めるとも多く、1920年代半ばに見せた活躍のように筆が振るわなくなった。1930年6月1日を最後にモード記者としての活動に幕を閉じた。その後1930年代前半は共産党系の新聞で翻訳や記事を担当していたことは分かっているが、詳細については今後の研究が待たれるところである。

## 2. 著書『人が衣装をつくる』

本稿で取り上げる『人が衣装をつくる』は、ミレナの二作目のエッセイ集として1927年に刊行された。タイトルになった *Člověk dělá šaty* は、チェコ語の諺 *Šaty dělají člověka* [直訳：衣装が人をつくる] を反転させた言葉である。元となった諺は、『標準チェコ語辞典第三巻』<sup>5</sup>によれば、「衣装が人に威厳、誠実さ、敬意を付加する<sup>6</sup>」とある。つまり、日本語のことわざ「馬子にも衣装」とほぼ同義語と言える。どのような身分であっても、立派な衣装を身に着ければ、威厳がもたらされるというこの考えは、階級社会の名残である。

ミレナが、タイトルとして冠したこのフレーズ「人が衣装をつくる」に託したメッセージは、本書収録の最初のエッセイの冒頭で説明されている。その冒頭箇所は次の通りで、以下は初出記事からの引用の和訳である。

衣装が人をつくるのではなく、人が衣装をつくるのである。気高く、体格がしっかりとしていて、柔軟であり、そして手入れの行き届いた身体を持った女性はどんなものでも着ることができ、その動きの優美さが衣装を透過して表に現れる、その衣装は優美さそのものとなり見事なひだをつくる。服は、言われるほど重要ではない。むしろ人が重要なのである。<sup>7</sup>

この記事の初出は1923年1月28日である。エッセイ集として1927年に刊行された際には最後の一文に小さな修正が加えられた。当初 *Ale člověk je důležitý*. [むしろ人が重要なのである] とされていた文から *Ale* [しかし、むしろ] が削られた。初出記事では、*Ale* の存在によって、結果として *Ale* に強い印象を与えていたが、エッセイ集で削除されたことによって、*Člověk* [人] が強調されることとなった。

つまり、ここでミレナが強調していたことは衣装ではなく「人」の重要性である。この主張は、エッセイ集全体に一貫して強調されている。そして、この主張こそが1920年代のミレナの大きなテーマの一つでもあった。

ミレナがこの言葉に強い思い入れを持っていたことは明らかである。しかし、彼女

だけではなく、他の執筆者による記事のタイトルもいくつかみられることから、ミレナだけが使っていた表現ではなかった<sup>8</sup>。特に1920年代前半においては、発信者である若手の知識層女性たちの間での共通認識であったといえよう。

本書は、タイトルに「衣装」という語が用いられていることから想像されるように、服装全般を共通テーマとしたエッセイ集である。

ミレナが活動の初期からモード欄を担当していたことを考えれば、必然的なテーマではあるが、彼女がモード記者として認識すればこそ、本書が二作目であると言うことに、多少の違和感を覚えざるを得ない。だがそこにミレナがモードに対して抱いていた思いが込められている。つまり、先に引用した記述からも分かる通り、ミレナにとってモードは二の次だった。その思いが、本書の底流として存在していることを意識しながら、特に初出記事から大幅な修正が加えられた箇所を中心に分析を行う。それによって、ミレナが本書に込めたメッセージの解読を試みる。

### 3. エッセイ集に込めたメッセージ：変更箇所の確認とともに

変更箇所には、正書法の訂正 (být → býti, je → jest, budít → buditi, víc → více, nebo → neb, aneb → nebo あるいは jako by → jakoby, popřípadě → po případě, na levo → nalevo, napravo → na pravo, třebaže → třeba že など) や、単数・複数の変更、語順の変更、数量の変更、完了体・不完了体の変更、外来語表記の訂正 (saison → sezon など) がある。また、新聞記事では「近頃」としていたところを、書籍化した際に具体的な時期を示すために変更することもあった (たとえば、tuhle dobu [近頃] → k podzimu [秋には])。このほか、一文における語順や使用単語の変更がある。使用単語の変更は、意味の変わらないものもあるが、意味が大きく変わるものもあった。また数量や金額の変更も見られた。それら特に細微な変更については、ミレナのみの判断ではなく、編集者や校閲者の判断もあったことであろう。その点について本稿では検証することはできないが、それらの可能性を念頭に入れておきたい。以上のような細かい修正箇所も大まかにおさえつつ、以下では主に削除および書き下ろした箇所を中心に検討を行う。

エッセイの収録順は初出順とは一致しない。収録されたエッセイには番号は付されていないが、本稿では、便宜上 ( ) で収録順を示し、[ ] で初出の古い順を示す。本稿でエッセイの配列の意図まで読み取ることは難しいが、エッセイを一つずつ検討することによってエッセイ集全体に込められたメッセージを読み取りたい。

(1)/[2] „Koupelna, tělo a elegance“ 「浴室、身体、そしてエレガンス」1923年1月28日付『国民新聞』、4面掲載 (以下、(31) 以外すべて同紙掲載)。

本エッセイは、巻頭エッセイとしてエッセイ集全体のテーマを提示しているといえ

る。エッセイ集出版年から4年遡る1923年に掲載され、掲載順としても2番目に古いものではあるが、この記事は、先に引用した冒頭のタイトルの説明の通り、「人」と「衣装」の関係性について、「衣装」よりも「人」の重要性を説いている。本エッセイが、序文に代わって巻頭に置かれた理由が何え、またこのエッセイ集全体に流れるテーマを暗示しているのが、次の箇所である。

Vůně lidské kůže a výraz lidské tváře, pohled, chůze, podání ruky a každý pohyb fyzického člověka jsou právě tak a snad více výrazy duše, jako jeho vlastnosti. Všecko, co člověk podniká, podniká z jednoho poramene své duševní vitality.

〔和訳〕人の肌の匂いや、人の顔の表情、姿、歩き方、握手、それから物理的に存在する人間のすべての動作は、その人の性質のように、まさに精神の表情そのものであり、おそらくそれ以上のものである。人の行動はすべて、その精神的活力を源としている。<sup>9</sup>

つまり本エッセイ集は、肩書上モード記者であったミレナらしく表向きには「衣装」をテーマにしていたが、その根底を流れるテーマは、人間の身体と精神の重要性であり、またその両側面の鍛練を提唱していたのである。上の引用箇所をもって、その大枠のテーマが本篇において提示されていた。

その上で、本篇のさらに詳細なテーマは、身体を手入れすることの重要性であった。身体を大切にすることについて、たとえば次のようなくだりがある。Láska k tělu je jednou z nejoprávněnějších lidských rozkoší. [身体への愛は人間のもっとも正当な喜びの一つである]あるいはNení tělo náš jediný přítel, na kterého se můžeme spolehnout? [身体は、わたしたちが信じることのできる唯一の親友ではなからうか?]である。このような身体への愛を体現する方法として、浴室での洗い方の説明や浴室の換気あるいは日光浴の重要性に主眼が置かれている。反対に、人工的な美容に対しては批判的な姿勢を見せた。美容室での手入れはほとんど信じないといい、太陽や空気や水に肌をさらすことで得られる効果の方が、人工品を用いた美容室でのマッサージより高いと述べた。

これらの記述の背後には、近代都市において身体文化がもてはやされた時代的背景が見られる<sup>10</sup>。ミレナも当時の時代潮流にならい、時代の理想的なスタイルを提唱していたのである。

変更点は、前述のAle以外では、正書法の修正および微妙な表現の修正が見られるが、本篇の内容に大きな影響を与えるものではない。ミレナの主張が初出から4年経っても変わっていなかったことの現れといえる。

(2)/[21] „Stanovisko k modě“ 「モードへの態度」1925年5月7日付、5面掲載。

巻頭エッセイが、「衣装」以上に「人」自体が重要であるという大きなテーマを掲げ、また、その中でも「身体」の鍛練の重要性を説いた上で、その次に収録された本エッセイは、服装に対する意識をテーマとした。ここでの主要なテーマは、次の一節から読み取れる。

Povinnost býti krásným je jednou z nejvšelijších lidských povinností a patří bez výjimky každému. Ale je velký rozdíl býti dobře oblečen, anebo býti luxusně oblečen. Případá mi, že je kulturním barbarstvím míti více šatů, než se nezbytně potřebuje, právě tak jako mi připadá, že je kulturním barbarstvím, je-li těch několik potřebných šatů ve skříní ošklivých.

〔和訳〕美しくいるという義務は、人間のもっとも情熱的な義務の一つであり、それは例外なく誰のなかにもあるものだ。しかし、良い服を身に着けるのか、豪華な服を身に着けるのかでは大きな差がある。わたしには、必要以上の数のドレスを持つというのは野蛮な文化のように感じられ、また、クローゼットの中の数着の必要なドレスが醜いものだったとしたら、それも先ほどと同じように野蛮な文化に見えてしまう。

つまり、本エッセイでもっとも言いたいことは、豪華な服を選べばいいのではなく、また、反対に服に関心を持つ必要がないという意味でもなく、良い服を選ぶセンスを身に着けることの重要性であった。

本篇でミレナは、自らが対象としているのはごく一部の富裕層ではなく、経済的につましい暮らしをしているが服や美にも興味を持っている層の女性たちだと明記している。すなわち中間層の女性たちといえるであろう。そのような女性たちは、富裕層の真似をして派手で目立つ服を買うのではなく、長期間着回すことのできる服を買うべきであると薦めた。また、仕立屋でなりふり構わず月に2着も買えるわけではないのだから、自分自身の見る目、つまりセンスを養うべきであり、またその方が、お金に任せてただ闇雲に買う女性よりよっぽど素敵だと述べている。全体的に中間層の女性たちに寄り添い、また思考力や判断力を啓蒙する内容である。

(1)のエッセイが身体の鍛練について述べたものであったのに対し、本エッセイは、精神面の養成を促す内容であった。

変更点は、カンマの追加や正書法の修正、語順の変更、指示代名詞の強調など、ごく些細なものである。エッセイ集の二番目に収録しているうえ、大きな変更がない点からも、本篇の主張に変更がなかったといえる。

(3)/[22] „Co dělá tělo a co dělá svadlena“ 「身体がすることと仕立屋がすること」1925年5月21日、5面掲載。

本篇の内容は大きく分けて二つに要約される。一つは、冒頭の一文 Prvním poznatkem, který potřebujeme k dobrému oblečení, je správná znalost vlastního zevnějšku. [良い服に必要な第一の知識は自分の外見について正しく知ることであり] に集約される通り、「己の外見を正しく認識すること」である。

また、二つめは、上を踏まえ、正しいフィジカルケアを行うことである。具体的には姿勢を正し、適度な運動で身体を鍛えることが服を着る際に重要だと述べている。すべてを要約するように、Ale pro nás jsou takové opravy důležitou věcí: a chcete-li, aby kabát dobře visel, dejte mu rovné věšáky. [しかし、わたしたちにとってこのような鍛え直しは重要である。すなわち、コートをやうまく掛けたかったら、まっすぐのハンガーにかけなさい、ということである] という一文で締めくくっている。

「コートをうまく掛けたかったら、まっすぐのハンガーにかけなさい」とは、つまり、服を着たときに美しくみられるためには、姿勢を正さなければならないということである。先のエッセイが精神面に対して働きかけていたのに対し、本エッセイは、(1) に立ち戻って再度、身体を鍛練を促す内容であった。

修正・変更点に関しては、上の二篇と比べると、単語の修正が多い。特に、文を強調する目的で使用されていた語や表現が削除あるいは修正されているものが目立つ。たとえば、A takové je to také s vlastním skutečným zevnějškem a s představou, kterou o něm máme. [このような類もその人の実際の見た目と関係があって、わたしたちがそれについて判断するイメージでもある。[下線は筆者、以下同様] の skutečným [実際の] が削除された。エッセイの冒頭で「鏡」をどう見るかということについて説明していたため、鏡の中の見た目と「実際の」見た目を区別するために初出記事では用いられていたであろう。しかし、「実際の」は、文意を明瞭にするための強調表現でしかなく、削除されても文意を大きく変えるものではない。

あるいは paničky, děvčata, mladíky [ご婦人、お嬢さん、若者] の mladíky [若者] が削除されている。ご婦人やお嬢さんが鏡を見ている姿をみてごらんなさいというのが文全体であるが、これに関しても、「若者」の有無で意味が変わることはない。「若者」が入ることで変化するのは、見る対象である具体例を増やすだけであり、そこから得られる効果は、強調以外考えられない。つまり、ここでもまた、強調していたものを抑える役目を果たしたといえる。

さらに、Nemyslím, že by různé metody,  které moderní doba vymýšlí  pro účelný vývin tělesný, byly tak rozdílné, že by se dalo říci:  právě ta je nejlepší  [身体の効果的な発達のために現代が考え出すさまざまな方法論が、これがまさに一番だとか言えるほど多岐にわたっているとは思えない] の  které moderní doba vymýšlí  [現代が考え出す] が削除

され、*právě ta je nejlepší* [これがまさに一番だ] は *která je lepší* [どれがより良いか] に変更されている。いずれにしても、強調表現を削除することによって、強すぎる主張を抑える働きをもたらした。新聞記事で多少思いが強すぎた点を、冷静な表現に変え、バランスを図ったとみられる。ただし、これらすべてについてミレナー一人の判断で行ったのではなく、編集者や校閲者の手が加わっていた可能性も考慮しなければならない。

(4)/[29] „Estetické předsudky“ 「美的な先入観」1925年11月15日、11面掲載。

外見や習慣に関する自国の文化度の過小評価や、アメリカやイギリス帰りのチェコスロヴァキア人の自身の文化度に対する過大評価を批判するエッセイである。このエッセイの意図は、次の一節にもっとも顕著に現れている。

Nezmenšují svoji kulturu nijakou domýšlivostí na ni a potkají-li člověka, který ji nemá, nejen že neohrnou nos, nýbrž ani to dobře nevidí, že ji nemá a vidí především, co má.

[和訳] 彼らは、自分の文化をそれに対するうぬぼれで矮小化することはせず、さらに自分と同じ文化を持たない人に出会っても、鼻であしらわないだけでなく、相手はその文化を持たない点に注目せず、何よりも相手が持っているものに目を向けるのである。

アメリカやイギリスなどの西側に憧れを持つ風潮、それ自体を批判するわけではないが、自国の文化を卑下する風潮については批判し、地に足をつけて自国の文化を磨こうとする姿勢が伺える。つまり、本エッセイは、またもや思考力を主とした精神面の啓蒙に重点を置いた内容である。

本篇は修正および変更箇所が多い。細かな点では、初出で具体的に挙げられた個人名や会社名が削除された。また、イギリス製の紳士靴のチェコの高級靴店での価格が、初出では300コルナだったところ350コルナに修正されていた。書籍化までの2年間に物価上昇の影響はあると思われるが、ほかに例に挙げられたオックスフォードシャツやチェコ製の靴の価格には変化がないため、輸入品の価格に変化があったのかもしれない。そのほかの細かな修正には、正書法の修正や語順の変更が見られるが、それらの些末な修正は大意に影響しない。

注目すべきは、まったく正反対の意味を表す単語に変更している箇所である。Nesměl by celulojdový límec být přijít draže, než plátěný a smoking by nesměl být aferou. [セル襟はリネン製より高くあってはならず、タキシードが事件になるなどあってはならない] が Nesměl by celulojdový límec být lacinější, než plátěný [...] <sup>11</sup> [セル襟はリネン製より安くなってはならず、[...] ] と全く正反対の意味に替えている。セル襟は、



化繊であることからリネンより安いはずである。したがって、理論的に考えれば初出が正しい。この場合、エッセイ集にする際に誤って直したとしか考えられないが、理由は不明である。

また、次のような表現の変更もある。

Co se mne týče, myslím, že si zaslouží, abychom mu stiskli ruku. Protože ještě větší nekultura, než nenosit pěkného prádla a nemít tip-top bot je žít nad své poměry a muž ve výborných šatech za cenu <sup>①</sup> několika dluhů je rozhodně menší gentleman, než muž s bavlněnou košilí s vědomím, že <sup>②</sup> má, nač si vydělá a dost.

〔和訳〕わたしはどうかという、彼<sup>12</sup>は握手をするに値する人だと思う。なぜなら、きれいな下着を身に着けないとか流行の靴を持っていないとかいうことよりも大なる非文化とは、自分の身の丈以上の生活することであり、<sup>①</sup>いくらかの負債を負うような価格の上等服に身を包む男性は、明らかに<sup>②</sup>自分の稼ぎに見合っていることを自覚して綿製のシャツを着ている男性よりも紳士度が劣るからである。

この記事が、エッセイ集では次のように変更された。以下、和訳は、最後の一文のみとする。

Co mne se týče, myslím, že si zaslouží, abychom mu stiskli ruku. Protože ještě větší nekultura než nenosit pěkné prádlo a nemít tip top boty, je žít nad své poměry. A muž ve výborných šatech a cenu <sup>①</sup> velkých dluhů je rozhodně menší gentleman, než muž vbavlněné košilí s vědomím, že za vnější kulturu <sup>②'</sup> nevydá více, než má.<sup>13</sup>

〔下線部を含む文の和訳〕そして、上等服に身を包みながら<sup>①</sup>大きな負債を抱える男性は、<sup>②'</sup>外見の文化には己が持つもの以上は表れないことを自覚して綿製のシャツを着ている男性よりも紳士度が劣る。

několik dluhů [いくらかの負債] から velké dluhy [大きな負債] への変更は、単語だけをみれば一見強調したかのようなのであるが、多少の負債でも抱えたら悪としていた初出記事にくらべ、エッセイ集では、大きな負債になってようやく悪としている。つまり負債に対して寛容になり、紳士度に対してもそれだけ許容範囲が広がったといえる。

また、②から②'への変更、「稼ぎに見合う」から「外見の文化には己が持つもの以上は表れない」は、微妙なニュアンスの変化ではあるが、「外見の文化」の強調を図ったと考えられる。

本篇ではこのほか、特定の女性記者を名指しで批判した箇所を削除している。その

箇所は次の一節である。

Myslím, že se sl. Rokyta mylí když praví, že je dobře říci lidem co možné vliďně, aby dělali to či ono jinak. Není člověka, kterého by to neranilo, kdyby to bylo sebe lépe a jemněji řečeno.

〔和訳〕わたしは、ロキタ嬢がこう言ったのは、つまり、人にはこうせよ、あせよとできるだけ優しく言うのが良いと言ったとすれば、彼女の誤った理解だと思う。たとえどれだけ良く、より優しい表現であったとしても、傷つけられない人などいないのだ。

また、美醜 [krásný-ošklivý] で表現していた食べ方については、善悪 [dobrý-špatný] に変更した。

以上の分析から、ミレナが直接的な表現を避け、冷静で穏やかなものに変更していたことが伺える。

(5)/[-] „Standardní oblékání nebo rozmarné modní novinky“ 「標準的な服または気まぐれな流行の新作」初出不明。

本エッセイのテーマは、タイトル通り、「標準的な服」と「流行服」の対立である。ミレナの理想は、前者である。前者については次のように描写している。

rovná, hladká linie, vzdušné, pohodlné šaty, nezamezující dýchání ani pohyb, naprostá jednoduchost beze všech okras a komplikovaností. Je to pokrok v každém slova smyslu. V estetickém i hygienickém. Ale neustále bojujeme ještě proti přívalům všelijakých modních novinek, které se pokoušejí zmařití nám naši vymoženost jednoduchosti.

〔和訳〕まっすぐでなめらかなライン、風通しがよく着心地の良いドレス、呼吸や動きさえも妨げず、装飾や複雑さが一切ない完璧なシンプルさ。それはどの意味においても進歩である。美的な意味においても衛生的な意味においても。しかしわたしたちは絶えずあらゆる流行の新作の氾濫と闘っている。流行の新作はわたしたちがシンプルから得られる快適性を妨害しようとするのである。

このことからわかるように、ミレナにとって、流行りの服やその新作とは、むしろ快適な服の普及の妨げでしかない。ここでは、その後、パリで活躍した20世紀初頭の代表的ファッションデザイナー、ポール・ポワレ (Paul Poiret, 1879-1944) とパリのモードについて、流行の移り変わりの早さや装飾の過多を取り上げて批判している。そして、フランスとイギリス、複雑とシンプルな二項対立を軸に、前者の批判と後者の勧

めで議論を展開させた。

本エッセイでは、身体面への記述は一切なく、内容自体は読者の思考を問うものである。但しここでは、それまでと異なり思考や判断を促すというよりも、あからさまなまでの装飾への批判とシンプルな賞賛に終始する内容となっている。

巻頭エッセイからこれまで、身体と精神の鍛練および啓蒙を交互に二度行ってきたが、ここでは、ミレナの当時の重要なテーマともいえる「シンプルな良さ」<sup>14</sup>を全面的に訴えかける内容の本エッセイを配置し、服装を考える際に、場や季節を問わずに着られる「標準的な服」の提唱を行った。

初出不明につき、現在も調査中である。

(6)/[20] „Hubená a štíhlá“ 「痩せとスリム」1925年5月3日、12面掲載。

端的に言えば、タイトル通り女性のスタイルについての話である。モードは痩せていることを好むと考えられているようだが、そうではないというのがミレナの主張である。モードが女性に痩せた体型を求めているのではなく、生活習慣や環境の改善、衛生面の向上などによって、女性たちが自立し、働くようになった結果、健康的にスリムになったと述べる。また、その体型を維持するために健康的な食生活、規則正しい生活を提唱している。このエッセイもまた、身体面についての問いかけである。このエッセイの中で、ミレナは理想的な美について次のように述べた。

tento estetický ideál nové doby bude opravdu krásným a je opravdu krásným jen tam, kde je fyziologicky dokonale provedený. Krásná žena nové doby není hubená, to je omyl. Krásná žena nové doby je štíhlá, tenká, pružná s napatými svaly, s úzkými kotníky a štíhlým zápěstím, ale svěží a plná.

〔和訳〕新しい時代のこの理想的な美こそが本当に美しいものとなり、それが生理学的に完璧に実行されたところでのみ本当に美しいものなのである。新しい時代の美しい女性は痩せこけてはいない、それは誤りである。新しい時代の美しい女性とは、スレンダーで厚みがなく、引き締まった筋肉と細い足首、スレンダーな手首のしなやかな女性であり、かつ活発でふくよかなのである。

ここでは、チェコ語の *hubená* と *štíhlá* の違いについて述べており、その訳出が難しいところではあるが、骨と皮だけで痩せている状態のように単に痩せていればよいのではなく、引き締まった筋肉を伴った健康的な細身の女性像を理想としたのである。この理想像を得るためには、身体の鍛練のみならず、食生活の改善も必要であり、それらについてもその必要性を唱えた。

本篇には変更箇所は三つしかない。そのうち二つは書籍化の際に、より正確性を付

与する修飾語 [zbytečný 余分な、dokonale 完璧に] をそれぞれ一つずつ追加した。修正の少なさからも、またその修正内容からも、文章や内容に対する不満や気持ちの変化はなかったと考えられる。

変更箇所三つのうちの残りの一つは、年数である。初出では、za dvacet let zmizí z lidí sádlo [20年後には人々から脂肪は消えているだろう] が za deset let zmizí z lidí zbytečné sádlo [10年後には人々から余分な脂肪は消えているだろう] と修正された。1925年には20年かかると思われていた人々の体型の変化は、2年後の1927年には10年で変化すると考えられたのだ。つまり、それだけ当初考えていたよりも速いスピードで人々の生活に変化がもたらされていたことが分かる。

(7)/[15] „Pisničky k pochodu“ / „Přes hory a doly, nohy mne nebolí.“ 「マーチ用の歌／山谷を越えても足痛まず」1924年6月8日、13面掲載。

本篇は、他と比べても非常に短いエッセイである。内容はモードと関連のあるものではなく、タイトル通り歌やリズムに関するものである。

外国に滞在するとき、あるいは田舎のどこかの牧草地に孤独に佇むときに、歌を歌うことによって元気が出ることを綴っている。このエッセイには、服飾にまつわるものは一切登場しない。ただ、歌を歌うことで元気を得るということを述べただけのこのエッセイは、まさに精神面の充実を図ることを目的としたといえるのではないだろうか。また、その後のエッセイが、山への遠足や、海水浴、スキーなどといった野外をテーマとした記述が続くことから、その際に歌を歌って元気づける心構えを伝える役目も果たしていたことであろう。

いずれにしても、本エッセイは、エッセイ集の表向きのテーマ「衣装」とはまったく無縁である。そのため、このエッセイの存在によって、エッセイ集の根底に流れるテーマ、つまり、「衣装」の前に「人」が重要であることが、浮き彫りになるのである。

本篇は、付録やサンプルの送付に関する記述が削除されたのみで、本文の変更はない。タイトルだけが変更された。

(8)/[24] „Moderní uzlíček pro moderního Honzu na moderní toulky.“ 「モダンな放浪の旅に出るモダンなホンザのためのモダンな荷物」1925年6月25日、5面掲載。

旅行や遠足に関するエッセイである。旅行といっても、山へのハイキングが主である。そのため、どのようなリュックサックがいいか、そのリュックサックには何を詰めて持って行くべきかといったことに内容が割かれる。ここでもやはり、服装についての記述はない。行った先の自然のある景色についてまで記述しており、全篇ハイキングについて書かれていると言って良い。

(6) まで並べられた身体と精神を磨くためのエッセイと趣向を変えて、精神面と身

体面両方を同時に鍛える、自然における活動の提唱の(13)まで続く。その第一弾として、野外遠足に行く際のリュックサックの選び方については、それぞれの頭で考えるよう促している。それが端的に表れている記述が次の通りである。I výběr jídla, které si berete s sebou na výlet, vyžaduje jistou zkušenost a znalost. [遠足に持っていく食べ物を選択についてもまた、確かな経験と鑑識眼を必要とする。] この記述以前は、リュックサックについて語られている。つまり、リュックサックについても食事についても、何を選ぶかが重要だと言うことである。そのセンスは、経験と鑑識眼に基づくわけだが、そのことを意識して考えることが重要だと述べたかったのであろう。このエッセイから読み取れるメッセージは二つある。一つは、野外遠足に出かけることの重要性であり、もう一つは、そこに行く際に必要となるものひとつひとつを選ぶセンスを磨くことの重要性である。つまり、このエッセイは、「人」の身体面と精神面の両面を磨くことを唱えている。

本篇においても大きな変更はほぼない。ほとんどが二語の語順の変更である。たとえば、Také je třeba naučit se upravit doma jídlo tak pěkně, [...] [家で食事の味付けをほどよく調整するのを習う必要がある] の doma と jídlo を Také je třeba naučit se upravit jídlo doma tak pěkně<sup>15</sup> と変更するなどである。このような変更は、本文の内容に大きな影響を与えるものではない。

一つだけ意味の異なる単語に変更されている。ベルトの説明で široké a měkké řemeny [幅広で柔かいベルト] から široké a dlouhé řemeny [幅広で長いベルト] に変更しているが、これについても本篇全体に影響を及ぼすものではない。初出の時点で強い意志を持って書いたといえる。

(9)/[23] „Moře, zázrak Boží“ / „Voda, zázrak Boží.“ 「海、神の奇跡／水、神の奇跡」  
1925年6月14日、9面掲載。

(8)のエッセイが山への旅行についての記述だったのに対して、(9)は、全般的に夏期休暇の海での過ごし方についてのエッセイである。このエッセイでもまた、服については一切触れられていない。

本篇はまずタイトルに変更が見られる。初出では「Voda, zázrak Boží. 水、神の奇跡」であったのが、エッセイ集では「Moře, zázrak Boží 海、神の奇跡」と変更された。水であれば河川やプール等も含まれるため、本篇の内容に合わせて変更したものと考えられる。また、内陸国であるチェコにおいて人々の憧れの存在といえる「海」をタイトルに付けることによって、国内にとどまらず、国外旅行を促す働きを与えた。

内容は、おもにプラハの中間層世帯であり、子どものいる家庭の主に主婦に向けて書かれたものである。プラハの中間層と想定されるのは、父親について、táta zůstane v Praze v kanceláři, bance nebo úřadě [お父さんはプラハの事務所や銀行あるいは役所

に残り]と書かれていることからプラハに住んでいることと、事務職であることが分かる。このような世帯に向けて、子どもの夏休みの間ずっと、プラハを離れて田舎で暮らすのではなく、夏休みに入ってからでもプラハに残り、父が夏期休暇を得るのを待つて家族皆で海辺で過ごすことを推奨している。本エッセイはまた、日光浴療法および海水浴療法を提唱しているともいえる。彼女は、*Fantasticky věřím v léčivou moc slané vody a slunce* [わたしは海水と太陽の治癒力を熱烈に信じている]と述べ、その海水と太陽が、都会での怠惰な生活や古くさい偏見によって一年の間にだめにしてしまったものを驚異的に矯正してくれる<sup>16</sup>とまで記した。また、最後の段落では、これらミレナの勧めに対する読者の判断に委ねるという旨を記述しており、自身の考えを単に押し付けるのではなく、読者の思考力や判断力にも働きかけているともいえる。

本篇には、いくつか変更箇所があるが、ほとんどが正書法の修正や語順の変更である。それでも冒頭の一文には、表現に多少の変更が見られた。

*Nechci ničeho namítati proti českému venkovu a Zapadlým Lhotám, [...]*

[和訳] チェコの田舎や Zapadlé Lhoty に対してなにも異議を唱えたくはない、  
[...]

と回りくどかった表現を、

*Nesmírně miluji český venkov a Zapadlé Lhoty, [...]*<sup>17</sup>

[和訳] わたしはチェコの田舎と Zapadlé Lhoty をこよなく愛している、[...]

のように、直接的でシンプルな表現に修正した。もっとも大きな修正を加えた箇所がこの一箇所である。すなわち、それほど大幅な変更は行われておらず、エッセイ集が目指すべき内容と合致していたといえる。

(10)/[31] „Raději sám anebo houfem?“ / „Raději sám nebo houfem?“ 「一人が良いか、あるいは集団が良いか？」1925年12月13日、17面掲載。

山への旅行、海への旅行と続いて本篇は、冬の雪山で行うスキー旅行の話である。これもまた、服装の話には一切触れられていない。

タイトルが示す内容は、冒頭で語られる。世の中には人ごみを嫌い、また手つかずの自然を愛する人がいるが、スキーヤーはこれに該当しないと述べる。スキーヤーは、雪山に電車で行く際に100人単位で移動することにも慣れているどころか、むしろその方が楽しいという。その後このエッセイはスキーの魅力について語っている。スキーに行くまでの間、電車の中での人々の様子、雪山の情景などが描写されている。雪の

きらめきと自然に戯れる人々の喜びに満ちた笑顔が目には浮かぶ記述からは、ミレナのスキーや雪山に対する思い入れが伝わる。

本エッセイから(13)まで連続してスキーについてのエッセイが続く。なぜスキーなのか。筆者は、ミレナが「人」の重要性を説くことを目的としていることから、スキーが「人」の精神と身体の両側面を鍛えるのに適したスポーツだと捉えていたからだと考えている。本エッセイでは、スキーヤーは人ごみを嫌うことなく大勢で楽しみ、また雪山で仲間や知らない仲間に遭遇しても喜んであいさつを交わすと述べていることから、スキーが精神的なゆとりをもたらすスポーツだと捉えていることが分かる。スキーを取り上げるエッセイの最初として、まず精神面をテーマに、スキーが「人」の精神面に良い働きかけをもたらすことを伝えたかったのではないだろうか。

変更点に関しては、本篇においても、それほど大きな修正や変更は見られない。カンマやピリオドの位置の修正や、正書法の誤りの修正が主である。また語順の変更が一箇所みられるが、意味を変えるものではない。本篇についても初出の頃と意見に変化がなかったといえる。

(11)/[7] „Na lyže!“ / „Na lyže.“ 「スキーへ！」 1923年12月6日、5面掲載。

(10)に続いてスキーに関するエッセイ第二弾である。(10)との違いは、ウィーンっ子のスキー旅行についての記述やスキーウェアについて詳しく描写されている点である。どのようなスキーウェアを着たら良いか、ダッフル<sup>18</sup>やローデン<sup>19</sup>のズボン、トリコティン<sup>20</sup>のブラウスなど具体的な生地の名前を挙げて説明している。また、ウールのスキーウェアは、一度転んだだけで水分を吸収し、またそれが冷却すると凍り付くものと説明し、少女向けに飾りのついたそのようなウールのウェアを否定した。また、ウェアの記述が続いたあと、スキーを行う際に必要な性質について説明している。

K lyžaření si připravte — kromě šatů — ještě dvě vlastnosti. Nejsou to sice vlastnosti potřebné jedině pro lyže, nýbrž pro každý sport, vážně provozovaný. Ale lyže jsou obtížné a nepohodlné, není to tak lehké, jak to vypadá, příliš často je člověk v situaci, která je zpropadená — a proto je jich třeba při lyžaření víc, než jinde: předně: nefňukat, za druhé: být druhu kamarádem.

〔和訳〕スキーをするには—ウェア以外に—もう二つの性質を備えよ。ただしそれは、スキーのためだけに必要な特性ではなく、真剣勝負のスポーツならどれにでも当てはまるものである。といってもスキーとは難しく厄介であり、見た目ほど容易ではなく、まごつくような状況に陥ることが非常に多い。—であるからこそ、他の場面においてよりもスキーをするときの方がより多くの特性が必要となる。第一に、泣き言を言わないこと、そして第二に、連れに対して

仲間であること。

スキーは簡単なスポーツではなく、遭難や怪我など危険の伴うスポーツである。ここでは、その危険を伴うスポーツを安全に行うために必要な性質を端的に述べた。裏を返せば、上で述べられた二つの性質を鍛えるためには、スキーが格好のスポーツだったと捉えていたことが分かる。つまり、ここでもやはりスキーが精神を鍛えるという点に重点が置かれた。しかし、その裏には、スキーが身体を鍛えるスポーツであることが前提としてあるため、スキーの精神的鍛練の要素を強調することで、スキーというスポーツが身体と精神にもたらす効果を伝えることができるのである。スキーにまつわるエッセイを二つ続けることによって、「人」を磨く上でのスキーの重要性を伝えていたのである。

本篇も細かい修正が多く、そのほとんどが正書法や単数・複数の言い換えである。それらが内容に大きな影響を与えることはない。

本篇で大きく異なる点と言えば、金額の変更である。スキー客は必ずしもその分の金銭的余裕がある者だけではなく、„drobní lidé“, kteří mohou vydat nanejvýš 50 až 80Kč pro sebe a družku za celý den se vším všudy [どんなときでも自分と彼女のために一日最高で50コルナから80コルナ出費できる「つましい人々」]という記述が初出には見られた。この「50コルナから80コルナ」という金額が、エッセイ集では「30から40コルナ」に下げられた<sup>21</sup>。初出は1923年末であり、チェコの経済状況は1927年の方が好転している。そのため、経済状況に合わせて金額を下げたというよりは、本来の正しい水準に合わせてと考えられる。

しかし、その他の考えには3年以上経っても変化なく、スキーが心身にもたらす影響についての自身の考えは揺らがなかった。

(12)/[30] „Moda a standardní ideál“ 「モードと標準的な理想」1925年12月13日、17面掲載。

タイトルで掲げられる、「モード＝流行」と「標準的な理想」についての矛盾について述べた。エッセイ集では、初出にあった冒頭の一文を削除し、標準的とは何かという話から始めている。

Standardní je takový tvar věci, který je naprosto, do největších důsledků účelný, odpovídá do nejmenších podrobností všem potřebám oné věci a proto není třeba, dokud ona věc nemění svou funkci, měnit tvar věci, jež jí slouží.

〔和訳〕標準的とはこういう形をしている、つまり確実に、きわめて便利で、その物のすべての要求を細微まで満たす形であり、よって、その物の機能が変



わらない限り、それにまつわる物の形を変える必要はないのである。

このように語られる標準的とはつまり形の変わらないものであり、突き詰めると、毎年変化をもたらすことを常とするモード＝流行から離れて行く。ミレナが考える標準的な理想がスキーウェアに当てはまるということで、このエッセイの後半ではスキーウェアに関する記述に終始する。ただし後半部については、書籍化の際に大幅に書き換えた。

具体的には、ユニフォームとプライベートの服のうちどちらが素敵に見えるかなど服装全般に関して述べた段落全体を削除し、スキーウェアに関する具体的な記述を新たに書き下ろした。エッセイのタイトル「モードと標準的な理想」からは決して連想されないが、もっぱらスキーウェアに焦点を当てたのである。以下が、書き加えた箇所である。長文のため原文は註に付す。以下、長文を引用する際には、原文は同様に註記とする。

このような標準的なスキーウェアは、すでに百回つくったことがあってこれからまた百回つくるであろう専門的な仕立屋に注文すれば、もっといいものが出るだろう。その際に、自分の意見に固執せず、仕立屋のことを完全に信用するだけ賢くあってほしい。試着してみてもその実用性を実感し、初めてのテレマク後に他の幻想的なスキーウェアすべてがいかにもばかげていて頼りなく見えるか自分の目で分かるだろう。それから自分が間違っていなかったと心に思うだろう。スキーウェアの小物に関しては、実はそれらについてもすでに規定がある。帽子はユニフォームの一部とみなされ、どこでも手に入る。白いスポーツ用ブラウスをズボンの中に入れ、その上にノルウェー製セーターを重ねて着る。もちろん、どんなセーターを着てもかまわないが、このノルウェー製は特別なウールからできていて、これと決まった典型的な見本がある。それは、すべての中でもっとも格好が良く、もっとも耐久性に優れており、ほかのセーターでは満足できないほどの統一感をもたらす。そのほか、コートの中に着るベストにはさまざまな種類がある。替え用にいくつか持っているより良い。極寒のときには首まで高く、胸、首、顎まで同時に保護するようなプルオン式のセーターを着てしまえば、マフラーを着用する必要はない。とても実用的なのは、ウールの袖なしベストであり、それは過不足なく程よく温めてくれる。経験のあるスキーヤーなら誰でも知っているが、スキーをしていて寒いということはほとんどない。このようなもじゃもじゃのウールの上着は、強烈な霜やひどい吹雪の時のためだけにある。重要なのは、シルクの袖と丸い革製のボタンのついたレザーベストである。山の上方で登山小屋に泊まるスポーツマンは、

それなしでは出かけられない。彼らにとってそのベストは、険しいハイキング後の着替えと快適さをもたらすものなのである

足元は、一般的なタイツの上にウールの分厚い靴下を履き、通常は靴の上にカラフルなノルウェー製のバンドを巻く。そのバンドは靴とズボンの間の隙間をぴったりと閉じ、雪が靴の中に入らないような防雪の役目を果たしながら同時に見た目もかわいいのである。手袋の代わりにはきちんとしたミトンをはめて、なにかしらのマフラーも巻きつける。

完璧なノルウェーウェアには防水、すなわちウォータープルーフのジャケットも含まれる。わたしたちは、どうってことのない雨をしのぐためにそれを着るのではなく、あちこちで吹く風をしのぐために着るのである。<sup>22</sup>

ユニフォームとプライベートの服の美の違いについて説明した初出記事と比べると、スキーウェアのコーディネートについての具体的で詳細なこの記述が、エッセイ集のために改めて書き下ろされたものとしては異質である。(10)、(11)、(12)、そして次の(13)とスキーに関するエッセイが続き、ここではスキーウェアの具体的な記述に終始していることから、ミレナのスキーやスキーウェアへのこだわりの強さが伺える。このスキーへのこだわりについては、次のエッセイの後でさらに検証したい。

ここでは、ミレナが必ずしも一般論だけをエッセイ集にまとめていたわけではなく、具体例を細かく挙げることもあったという指摘にとどめたい。彼女は『人が衣装をつくる』を出版するにあたり、完全なる普遍性だけでなく、ある種のトレンドも抑えようと努めていた。

(13)/[8] „O výbavě do sněhu pro hořejších deset tisíc“ 「上位一万人のための雪道具について」1924年1月6日、10面掲載。

(10) から続いていたスキーに関する記述は本篇まで続く。スキーがテーマといってもここでは、雪山のふもとにある高級ホテルや大型ホテルに泊まる際の身だしなみや持ち物についての記述が主である。ただし、決して富裕層の視点に立っているわけではない。あくまでも中間層と同じ高さの目線から記述している。大型ホテルに泊まる際にはスキーウェアだけを持参すればいいわけではないことや、リュックサック一つでは中に入れないことがあると伝える。これらの記述は、決して富裕層のためのものではない。中間層が贅沢をする際に、どのような持ち物を持てば良いのか、またどのような心構えでいるべきかについての指南なのである。

本篇には内容の大きな変更は見られない。些細な修正や変更はいくつか見られるが、いずれも文章全体をすっきりとさせるためのものである。また、時事性の排除も見られる。My normální smrtelníci jsme si řekli už před svátky, jak se obléknout na lyže. [わ

たしたち普通の人間はすでに「クリスマス」休暇前には、スキーのときに着る服について考えてきた]を My normální smrtelníci jsme si řekli už dostatečně, jak se obléknout na lyže. [わたしたち普通の人間は、スキーのときに着る服についてすでに十分に考えてきた]と、新聞掲載時にあった時事性を排除し、一般的な用語に置き換えた。

以上スキーに関するエッセイが(10)から4篇、連続して並べられた。このことはいったい何を意味するのであろうか。ミレナがこのように4篇も並べた意図はどこにも書かれていないためあくまで推測ではあるが、先にも述べたように、筆者は、ミレナがスキーにこだわった意図はその特性にあると考える。つまり、(10)や(11)の考察でも述べたように、ミレナがスキーを心身共に鍛えることのできるスポーツだと考えていたからである。彼女はモード記者ではあったが、モードよりも女性の精神と身体を鍛えることに重点を置いていた。本書もまた、『人が衣装をつくる』というタイトルの通り、「人」の重要性を強調している。つまり、スキーというスポーツが女性を自然に啓蒙する上で格好の素材だったのである。

(14)/[13] „Do vody“ 「水の中へ」1924年5月8日、5面掲載。

本篇は、冒頭で、苦痛と喜びの関係について説明し、苦痛があるから喜びを感じるのだと述べている。そこで、nic na světě léčivé, jako radost [世の中には喜びほど治癒力のあるものはない]と述べるほど、喜びの必要性を説いている。その上で、主となるテーマが水との戯れである。競技としての水泳ではなく、あくまで水に浮かぶことの喜びを取り上げている。そして、喜びが人にもたらす効能について説き、心身の鍛錬の後に喜びで癒すことを教えている。

本エッセイで伝えたいメッセージとは、水に浮かび戯れることは、日光浴や大気浴などによって身体を整えるだけでなく、内面にも働きかけ、喜びによって「人」の精神を磨くことができるということである。つまり、身体と精神を磨くためには、スキーだけでなく、「水」の存在もまた重要であることを示したのである。

修正・変更点に関しては、(13)のように、時事性の高い表現を一般論に置き換えた。ただし、(13)では単語レベルであったものが、本篇では段落全体の変更を行った。

まず、自身がイタリアで体験した記述のすべてを削除し、ごく一般的な記述を追加した。以下が、初出記事から削除され、エッセイ集には掲載されなかった箇所である。

あとは海水浴での話だ。たとえば、イタリアでは女性たちはTシャツを着てはいけない—これは、昨年わたしが実際に経験したことで、太ったイタリア人のおばあさんがわたしに対して不満に思う理由やわたしにどうして欲しいのかということ、わたしが理解するまでに多くの難問が立ちほだかっていた—他の場所では、Tシャツは過ちでもなんでもないが、ほとんどの女性はそれを着な

い。端的に言えば、海水浴には、水に浸かるためのものと浜辺で横になるためのものを持っていく必要があるのだ。一度でもこの違いに合わせて用意するとなると、たちまちドレスの数は増え、砂浜で横になるためのものや当然おしゃれな機会に着るものも必要になる。生活や海とはこうである。どこかの浜辺でだれかが朝から日の入りまで横になっている一方、服を着た人が歩き、食べ、飲み、寝て、読んで、書くような場所なのだ。だからこそ、そこにもまた明確な意味と許可が存在するのである。このような服装は、日焼けした滑らかな素足がまとう軽装靴とともにこそ生き残り、そして実は赤い革のサンダルはこのような服装においてこそすばらしく素敵なものとなるのである。それだけでなく、白や緑、茶色のサンダルもまた素敵である。本を読むときや手仕事をするとき、本の上に少し日陰が欲しいとき、こういうときに頭上に開く大きなパラソルのおすすめ。パラソルは騒がしければ騒がしいほど素敵であり、あるいはけたたましければもっと素敵である。突き刺すような海水や空と突き刺すような黄色い砂のほか、灼熱の太陽のもとでは、もっとも派手な色は子羊のように穏やかな色であるだけでなく、穏やかな色は派手な色が映えるようなところでは目を傷めるものなのである。<sup>23</sup>

この後は、色や柄についての具体的で詳細な記述が続く。このような具体的な記述を削除した上で、ミレナが書き下ろした記述は次の通りである。

近年、スポーツが開花してすべての階層にひろまった。であるからこそ、それぞれの種目が、実用性の法則に従ってそれぞれのユニフォームを創り出したのである。最初の水泳用ユニフォームは黒のTシャツであり、今日まで残っている。ただし、このユニフォームにはいくつかのデザインが加わった。たとえば、アメリカのモダンなTシャツ、すなわちショートパンツとスカートで構成されベルトで締めるタイプのは、今後も存続する。男性がちょうどこのようなTシャツを着ているから浜辺では男女の区別がつかないだろう。それから最近では、カラフルなTシャツも流行しており、それらを拒む理由は見当たらない。緑色、あるいはコーンフラワーブルー色、あるいは青色は、日焼けした肌にはぴったりで、弾力のある鍛えた筋肉には特に似合うのだ。<sup>24</sup>

削除した箇所が具体的で細かい記述であるのに対して、新たに書き加えたこの段落は、具体的な色の例を挙げながらも、全般的には当時の水着の流行を綴った概論であり、ずっとシンプルな記述である。

新聞記事では時事性や具体的なエピソードを加えることによって、人々の興味を惹

き付けることができる。しかし、初出から3年経って見返したときに、それが古い記憶に変わっていたのかもしれない。いずれにしても、一般的な記述に変更することによって、水着の説明は明解になった。

(15)/[4] „Do deště“ 「雨の中へ」1923年3月25日、4面掲載。

水からの連想で雨と雨具についてのエッセイである。初出に変更が加えられなかったのは、前半の短い三段落のみである。初出の冒頭部は、プラハの地名や時事性の高い内容のため、エッセイ集では削除された。削除されなかった三つの段落は、春夏の雨の美しさについて描写されている。Neznám nic krásnějšího nad jarní a letní deště, nemají daleko té ponurosti, bezútěšné nepřetržitosti podzimních lijáků. [春と夏の雨以上に美しいものを私は知らない、それらには、秋の土砂降りの持つ憂鬱さや絶望的な持続性と遠くないものがある。] この一文が象徴するように、ミレナは雨の長所を綴った。

初出では三種類の服のイラストを掲載し、記事の大半がそのイラストの説明に割かれた。そのため、イラストの掲載されないエッセイ集においては、イラストに関する記述すべてが削除され、新たな文章が書き下ろされた。注目すべきは、その内容が服についてではなく読者の内面に問いかけるものだったことである。

書き下ろしの冒頭では、Nezákladnější a nejdůležitější vlastností pěkného oblékání je přesné rozeznávání účelnosti obleku.<sup>25</sup> [素敵な装いの特性のもっとも基本的でもっとも重要なことは、服の目的について正確な認識である] と述べ、どのような組み合わせがいいのか、あるいは服を着る際のTPOを抑える必要性は、食べ物や行動、社会常識についての大原則を知る必要性和同等だと記している。そしてそこから敷衍して考え方や生き方など思考力や判断力の養成を図る記述を始めた。

男性にしても女性にしても、彼女にとって決して理想としないのは、Mám-li však na mysli ideál ženy nebo ideál muže, nepředstavuji si naprosto člověka, který by celý svůj život dělal všechno správně, dobře, jemně, vkusně, vychovaně.<sup>26</sup> [正しくて、良い人で、穏やかで、趣味良く、また育ちの良い人]であった。それに対してミレナが求めた理想像は、次のようなものである。

良い教育の必要性のはるか前に、一人の人間であるということの必要性が立ちはだかっているのである。つまり、あなたや彼女らの性格という意味ではなく、たとえそれがどんなものであってもとにかくなんらかの性格を備えるという意味である。心の顔を持つこと、内なるプロフィールを持つこと、自立した人、自分でものを考えられる人、自由に決断する人、そして話し合いをする人であること。 こういう人は、社会的な問答を常に自分自身の要求に従って評価しなおすのである。ほうれん草を食べるときには、他の育ちの良い人々の食べ方と

まさに同じように食べるが、ただ別の方法、言ってしまえば知的な食べ方をするのである。形は素晴らしいものである、もしそこに心がこもっているならば。しかし心は思われているほど素晴らしくはない、もしそこに形が伴わなければ。心を込めることは、世の中を形式通りコントロールすることほど難しいことではない。しかし、形をコントロールすること、しかもそれを知的に、また先入観を持たずにコントロールすること、これこそがまさに人間の理想なのである。<sup>27</sup>

このエッセイのタイトルは「雨の中へ」であって、本来であるならば、雨具について中心的に頁が割かれるはずである。しかしここで語られているのは、あくまで思考力についてである。特に下線部には、ミレナの主張が込められている。「自立し、自分の考えをしっかりと持つこと」は、生活のあらゆる場面で適用されるべき思考である。ミレナの目的は、このような考え方の伝播にあったといえるが、それをあえてモードという手段を通して行った。なぜなら、服が単に着るものではなく、自らの思想をも反映するものと捉えていたからである。そのため、服を選ぶ際や着る際にも、この自立心や思考力あるいは判断力の必要性を訴えていたのである。

彼女は、この後、雨具の話に戻る。そこで、読者がエッセイに対して雨具から話が脱線していることに疑問を持つだろうと推測し、*Myslíte si, že to nepatří k povídání o parapletu, ale mýlíte se.* [あなたたちは、この話は傘についての話ではないと思うだろうが、それは見間違いである] と切り出す。この思考力の話は、結果として雨具を選ぶ際の判断力の話に連結される。つまり、雨具は何のために存在するのか、何を目的としているのかを考えると、自ずとレインコート、それもトレンチコートが最適であることに気づくはずだと導くのである。

批判の対象は雨傘にある。*Chodit v dešti v hedvábných šatech, vykrojených střevících a krajovém klobouku s deštníkem nad tím vším, je nesmysl.* [シルクのドレスを着て、つま先の見える靴を履いて、レースの帽子をかぶり、それらすべての上に雨傘をさして雨の中を歩くことはナンセンスである!] と述べ、当たり前のように誰もが行う傘をさすという行為を一刀両断に否定する。しかし、これにとどまらない。ミレナは、このような状況に対して何の疑問も持たず、当然のこととして受け入れる女性たちのその姿勢を批判しているのである。

しかしナンセンスとは偶然ではなく、この悲しく滴る雨傘、だめになったシルクと割れたエナメル革について語る雨傘は、それを頭上にかざす人間の非論理的な思考について物語っている。人間があちこちで間違いをおかす原因である曲がった考え、あるいは考えが飛躍してしまうことを物語っている。単純な解

決策の代わりに、すなわち丈夫でしっかりした生地代わりに、人間は滴の落ちる動くひさしを作り出したのだ!<sup>28</sup>

この後続くトレンチコートに関する具体的な記述は端的に語られる。それがアメリカのものであり、そして男性のものであったこと、またイギリスの兵士のコートとしての過去についてなどトレンチコートの歴史から機能について述べている。その機能性について「テン・イン・ワン」すなわち、「一つで十の利」とまとめ、着回しの良さを強調した。

論理的に考えれば、「丈夫でしっかりした生地」のレインコートを着るほうが、わざわざ滴のたれる傘を頭上にさすよりもよほど機能的である。しかし、あえて論理にとらわれず美的な外見を優先するのが一般的なモードの考えである。モード記者であるはずのミレナはモードの一般論を否定し、それを鵜呑みにする女性たちをも批判した。

つまり、ミレナはモードをテーマとしたエッセイ集を編集しながら、単なるモード・エッセイに留めず、自身が本来伝えたいメッセージを盛り込んでいたのである。そのメッセージとは、身体と精神の鍛練、モードや生活におけるあらゆる非論理的な思考の排除、そして思考力および判断力の養成だったといえよう。

## おわりに

本稿では、エッセイ集『人が衣装をつくる』の第1篇から第15篇までを考察した。ミレナは、エッセイ集全体を通して流れる主題「人が衣装をつくる」について、第1篇の「浴室、身体、そしてエレガンス」を筆頭に様々なテーマを用いて「人」の重要性を訴えた。本稿で確認した前半部では、次のことが言える。

まず第1篇でエッセイ集全体のテーマ、すなわち「衣装」よりも「人」の重要性を語り、また「人」のなかでも「身体」を鍛えることの重要性を説いた。その後第6篇まで、身体と精神に対して交互にアプローチを試みた。第2篇の「モードへの態度」では、モードに対峙するときの心構え、すなわち精神面にアプローチし、第3篇では、正しい姿勢やバランスの取れた身体作りを提唱し、規則正しい生活を指南するなど身体面の養成を促した。第4篇「美的な先入観」では、自国の文化を過小評価することを批判し、文化度について説くことによって、再度精神面の啓蒙を図った。また、第5篇では、それまでの身体の鍛練と精神の啓蒙を踏まえて、初めて「衣装」に目を向け、シンプルな服の推奨を行った。第6篇の「痩せとスリム」で再び身体について語り、第7篇では「歌」を通して精神面の充実を促した。ただし、第7篇は、単に精神面の充実を促しただけではなく、それ以降の野外での活動における心構えを伝える役割も果たしている。その後、第8篇から第10篇までは、ハイキング、海、雪山など

自然との触れ合いを通して、身体および精神両面について働きかけた。

第10篇が上と重なるが、第10篇から第13篇まではスキーとスキーウェアに集中した。一見、「人」の重要性を説く趣旨からは大きく離れ、スキーへのこだわりに傾いたようにも思われるが、ミレナはスキーこそが身体と精神両面を養うものとして捉えていた。よってスキーに頁を割くことで、身体と精神の両面から離れることはなかった。

第14篇と第15篇では、水と雨、そして水着と雨具をテーマとしながら、それらは、表面的に身体を磨くことと思われがちなためか、主に精神の啓蒙に重点を置いた。よって、ここでもこれらのテーマを扱うことで身体と精神をバランスよく整える内容となっている。

これらの分析から分かることは、ミレナがモードを扱いながら、女性の身体と精神の二つの側面を磨き養うことを意図していたということである。モードとは、ミレナにとってそれほど重要ではなかったが、女性に問いかける手段としては格好の媒体ではあった。特に第6篇までの身体と精神の両面を交互にテーマとしている点からは、両面をバランス良く研磨するミレナの意図が明白となった。

本稿は前半部の分析に限定したが、別稿にてさらに後半部も同様に分析し、ミレナが『人が衣装をつくる』に込めたメッセージの全貌を読み解きたい。



【表】『人が衣装をつくる』初出一覧

	Tituly v knize (v noninách)	タイトル邦訳 (初出)	掲載日
1	Koupelna, tělo a elegance.	浴室、身体、そしてエレガンス	28. 1. 1923
2	Stanovisko k modě.	モードへの態度	7. 5. 1925
3	Co dělá tělo a co dělá švadlena.	身体がすることと仕立屋がすること	21. 5. 1925
4	Estetické předsudky.	美的な先入観	15. 11. 1925
5	Standardní oblékání nebo rozmarné modní novinky	標準的な服または気まぐれな流行の新作	不明
6	Hubená a štíhlá.	痩せとスリム	3. 5. 1925
7	Pisničky k pochodu. (Přes hory a doly, nohy mne nebolí.)	マーチ用の歌 (山谷を越えても足痛まず)	8. 6. 1924
8	Moderní uzlíček pro moderního Honzu na moderní toulky.	モダンな放浪の旅に出るモダンなホンザのためのモダンな荷物	25. 6. 1925
9	Moře, zázrak Boží. (Voda, zázrak Boží.)	海、神の奇跡 (水、神の奇跡)	14. 6. 1925
10	Raději sám anebo houfem? (Raději sám nebo houfem?)	独りが良いか、あるいは集団が良いか?	13. 12. 1925
11	Na lyže! (Na lyže.)	スキーへ! (スキーへ)	6. 12. 1923
12	Moda a standardní ideál.	モードと標準的な理想	13. 12. 1925
13	O výbavě do sněhu pro hořejších deset tisíc.	上位一万人のための雪道具について	6. 1. 1924
14	Do vody.	水の中へ	8. 5. 1924
15	Do deště.	雨の中へ	25. 3. 1923
16	Boty a střevíce.	靴とパンプス	6. 4. 1924
17	Kůže.	革	25. 1. 1923
18	Pro denní potřebu.	普段使いのために	10. 9. 1925
19	Límečky.	襟	4. 2. 1923
20	Pro večer a ráno.	晩と朝のために	7. 6. 1923
21	Pro sport.	スポーツのために	10. 5. 1923
22	Umění dobře nakoupit.	上手く買う技	11. 10. 1925
23	Budoucí maminky.	未来のママたち	23. 3. 1924
24	Především to mikádo.	何よりもまずボブヘア	6. 9. 1925
25	Maminko, buď hezká. (Maminko, buď hezká!)	ママ、きれいでいて (ママ、きれいでいて!)	19. 4. 1925
26	Pull-over a co k němu patří.	プルオーバーとその付属品	13. 9. 1925
27	Všeho s měrou.	何でも適度に	1. 5. 1924
28	Moderní prádlo a moderní jeho vyšití.	モダンな下着とモダンな刺繍	20. 11. 1924
29	Cetky a tretky.	安物の派手な装飾	26. 4. 1925
30	Chvála Anglie.	イギリスの自慢	8. 2. 1925
31*	Sportovní ráz oblékání.	服装のスポーツ的特徴	9. 11. 1926
32	Na venek.	田舎へ	25. 5. 1924
33	Moderní klepaření.	モダンなうわさ	21. 2. 1924

\* : Sportovní ráz oblékání. のみ週刊誌 *Pestrý týden* に掲載。その他はすべて日刊紙 *Národní listy* に掲載。5: Standardní oblékání nebo rozmarné modní novinky. の初出については現在も調査中であり、詳細不明。

【主要参考文献】

*Národní listy*, 1923-1925.

*Pestrý týden*, 9.11.1926.

Milena. *Člověk dělá šaty*. Praha: Topič, 1927.

Buber-Neumann, Margarete. *Kafkas Freundin Milena*. München: Gotthold Müller, 1978 (1963). [マールガレーテ・ブーバー＝ノイマン『カフカの恋人ミレナ』田中昌子訳、平凡社、1993年。]

Černá, Jana. *Adresát Milena Jesenská* (Druhé české doplněné vydání). Praha: Concordia, 1991 (1969).

Hayes, Kathleen. *The Journalism of Milena Jesenská: A Critical Voice in Interwar Central Europe*. New York, Oxford: Berghahn, 2003.

Hockaday, Mary. *Kafka, Love, and Courage. The Life of Milena Jesenská*. Woodstock, New York: The Overlook Press, 1995.

Marková-Kotýková, Marta. *Mýtus Milena. Milena Jesenská Jinak*, Praha: Primus, 1993.

*Slovník spisovného jazyka českého I.-IV.* Praha: Nakladatelství Československé akademie věd, 1960.

Vondráčková, Jaroslava. *Kolem Mileny Jesenské*. Praha: Torst, 1991.

Wagnerová, Alena. *Milena Jesenská*. Praha: Prostor, 1996.

大沼淳、萩村昭典、深井晃子監修『ファッション辞典』第7版、文化出版局、2009年。

松下たえ子編訳『ミレナ記事と手紙——カフカから遠く離れて』、みすず書房、2009年。

森山学「『レスプリ・ヌーヴォー』期におけるピエール・ウィンターの身体文化理論——ル・コルビュジエとその協働者ピエール・ウィンターの身体文化理論に関する研究その1」『日本建築学会計画系論文集』第585号、2004年。

【註】

<sup>1</sup> ミレナは、執筆活動においていくつものペンネームを使用していたが、その中でもっとも多く使用されていたのが「ミレナ」である。また、カフカからの手紙がきっかけとなって知られるようになったせいか、日本の研究者の間でもすでに「ミレナ」が定着している。そのため、本研究においても「ミレナ」を略称として用いる。

<sup>2</sup> 1. „Koupelna, tělo a elegance.“, 2. „Stanovisko k modě.“, 12. „Moda a standardní ideál.“, 16. „Boty a střevíce.“, 23. „Budoucí maminky.“, 24. „Především to mikádo.“, 25. „Maminko, buď hezká.“, 27. „Všeho s měrou.“, 29. „Cetky a tretky.“, 30. „Chvála Anglie.“, 32. „Na venek.“ は、先行研究にてその初出が記載されていた。

<sup>3</sup> 稿末の【表】に一覧を提示した。

<sup>4</sup> 日本語でも読めるものとしては、ブーバー＝ノイマンによる『カフカの恋人ミレナ』（田中昌子訳、平凡社、1993年）、また、ミレナの略伝と一部の記事の邦訳が、松下たえ子編訳『ミレナ記事と手紙——カフカから遠く離れて』（みすず書房、2009年）がある。英語では Mary Hockaday. *Kafka, Love, and Courage: The Life of Milena Jesenská*. Woodstock, New York: The Overlook Press, 1995、チェコ語ではミレナの娘による伝記 Jana Černá. *Adresát*

- Milena Jesenská (Druhé české doplněné vydání). Praha: Concordia, 1991 (1969). および同僚による伝記 Jaroslava Vondráčková, *Kolem Mileny Jesenské*. Praha: Torst, 1991. などがある。他、ドイツ語による伝記も刊行されている。
- <sup>5</sup> *Slovník spisovného jazyka českého: III R-U*, Praha: Academia, Nakladatelství Československé akademie věd, 1966, str. 663.
- <sup>6</sup> Šaty dodávají důstojnosti, vážnosti, úcty (*Ibid.*)
- <sup>7</sup> Milena. „Koupelna, tělo a elegance.“, *Národní listy*, roč. 63, č. 26, 28.1.1923, str. 4. [原文: Nedělají šaty člověka, ale člověk dělá šaty. Žena vznosného, urostlého, pružného a pěstěného těla může obléci všelicos a elegance pohybů prosakuje šatstvem, které se na ní rovná v podivuhodnou draperii. Šaty nejsou tak důležité, jak by se řeklo. Ale člověk je důležitý.] Milena. „Koupelna, tělo a elegance“, *Člověk dělá šaty*, Praha: F. Topič, 1927, str. 9.
- <sup>8</sup> 1919年4月6日付『トゥリブナ』*Tribuna*において、R-a. が „Člověk dělá šaty“ という記事を、また、表現は異なるが、1922年10月8日付『トゥリブナ』別刷『モードゥニー・リスティ』1-2面には M.F. が „Šaty člověka nedělají“ という記事を書いている。
- <sup>9</sup> Milena. *Člověk dělá šaty*. Praha: F. Topič, 1927, str. 9.
- <sup>10</sup> たとえば、1862年にチェコで創設されたソコルによる体操運動などは、チェコにおける身体文化の象徴ともいえるであろう。身体文化に関しては、フランスで活躍した建築家ル・コルビュジエ (Le Corbusier, 1887-1965) の協働者である医師ピエール・ウィンター (Pierre Winter, 1891-1952) が身体文化に関する論文を発表し、「新身体」の概念を提示している (森山学「『レスプリ・ヌーヴォー』期におけるピエール・ウィンターの身体文化理論——ル・コルビュジエとその協働者ピエール・ウィンターの身体文化理論に関する研究その1」『日本建築学会計画系論文集』第585号、2004年、213-218頁)。あるいは、イサドラ・ダンカン (Isadora Duncan, 1878-1927) を始めとする、20世紀初頭のモダンダンスの流行からも身体文化の重要性の高まりが分かるであろう。
- <sup>11</sup> Milena. *Ibid.*, str. 21.
- <sup>12</sup> 少し流行から外れているかもしれないがしっかりとしたパチャ製の靴を90コルナで買い、本場では既製品として売られているにもかかわらず、チェコでは高級店で300コルナの値がつくイギリス製の靴をナンセンスと呼ぶ人。
- <sup>13</sup> Milena. *Ibid.* str. 21.
- <sup>14</sup> ミレナは、本エッセイ集が刊行される前年の1926年に初エッセイ集『シンプルへの道』を刊行している。このエッセイ集では、タイトル通り、シンプルを到達点とし、シンプルの良さを伝えることが全体のテーマにある。巻頭エッセイでは、幼いころは装飾や華やかなものに憧れるが、世の中が分かってくるにつれ、また田舎から都会がそうであるように洗練されてくるにつれ、考えがシンプルに到達するのだと主張している。Milena. *Cesta k jednoduchosti*. Praha: F. Topič, 1926.
- <sup>15</sup> Milena. *Člověk dělá šaty*. str. 33.
- <sup>16</sup> 原文: Slunce a slaná voda zázračně napravují, co jsme za rok zkazili městskou leností a skorem středověkými předsudky. Milena. *Ibid.*, str. 36.
- <sup>17</sup> Milena. *Ibid.* str. 35.
- <sup>18</sup> ダッフル [duffle]: 両面起毛した厚地の粗い紡毛織物。ダッフル・コートや毛布などが主用途。大沼淳、萩村昭典、深井晃子監修『ファッション辞典』第7版、文化出版局、2009年、

314 頁。

- <sup>19</sup> ローデン [loden] : 紡毛織物の一種。上質でない紡毛糸を使った粗雑な厚地織物で防水性がある。チロル地方の男子民族服のコートに使われる。『ファッション辞典』、330 頁。
- <sup>20</sup> トリコティン [trikotine] : 梳毛織物の一種。ギャバジンに似た畝の高い織物で、綾目も太めで右上がりのはっきりした角度。柔らかで弾力に富み、トリコットに似ているところからつけられた名称。おもにスーツ、スカートに用いられる。『ファッション辞典』、317 頁。
- <sup>21</sup> „drobní lidé“, kteří mohou vydat nanejvýš 30 až 40 Kč pro sebe a družku za celý den se vším všudy, [...]
- <sup>22</sup> Milena. *Ibid.* str. 48-49. [原文 : Uděláte nejlépe, když si takový standardní lyžařský dres objednáte u krejčího odborníka, který ho už stokrát dělal a stokrát ještě udělá. Budete jen chytré, když k tomu nebudete mít svoje mínění a spolehnete se úplně na jeho radu. Až ho vyzkoušíte a poznáte jeho praktičnosti a na vlastní oči uvidíte, jak směšné a splihle vypadají všechny fantastické lyžařské dresy po prvním telemarku, řeknete si, že jste nechybili. Co se doplňků k lyžařskému dresu týče, i ty jsou už vlastně předepsány. Čapka patří k uniformě a dostanete ji všude. Do kalhot patří bílá sportovní košile a přes ní norský sweat. Ovšem že můžete obléci jakýkoli sweat, ale tento norský je ze zvláštní vlny a má typický vzorek. Je z všech nejhezčí, je také nejtrvanlivější a doplňuje celek v harmonii, kterou jiný sweat nedociluje. Ostatně takové vesty pod kabát jsou všelijaké. Je lépe, máte-li jich několik na střídání. Pro tuhou zimu nosí se sweaty bez zapínání, vysoko ke krku, chránící hrud', krk i bradu současně a nepotřebujete k nim už šály. Velmi praktické jsou vlněné vesty bez rukávů, které hřeji právě tak, jak je zapotřebí, ani ne mnoho, ani ne málo. Každý zkušený lyžař ví, že na lyžích bývá málokdy zima a takové huňaté vlněné obaly jsou jen pro případ třeskatých mrazů nebo strašných vánic. Znamení je kožená vesta shedvábnými rukávy a kulatými koženými knoflíky: sprosmami, bydlící vysoko na horách ve sportovních boudách, se bez ní neobejdou. Slouží jim k převléknutí a k pohodlí po těžkých turách.

Na nohu oblékněte obyčejné punčochy a přes ně vlněné tlusté ponožky, obyčejně se přes boty nosívaly barevné norské ovinovačky, které neprodyšně uzavírají skulinu mezi botou a kalhotou, bránice sněhu, aby se nedostal do boty a při tom také roztomile vypadají. Místo rukavic pořádné palčáky a nějakou tu šálu už také splašíte.

K dokonalému norskému dresu patří nepromokavá kazajka, waterproof. Nenosíme ji na ochranu proti dešti, který nám nevadí, ale proti větru, který pronikne všude.]

- <sup>23</sup> Milena. „Do vody.“, *Národní listy*, 8.5.1924, roč. 64, č. 127, str. 5. [原文 : Jinak je tomu však vmořských lázních. Na př. v Itálii ženy trika oblékati nesmějí — zažila jsem to loni na vlastní kůži a stálo mne že notný hlavolam, než jsem pochopila, proč tlustá italská banina je se mnou tak nespokojena a co vlastně ode mne chce — jinde sice triko není závadou, ale většina žen ho nenosí, zkrátka, do mořských lázní je třeba vyzbrojit se něčím, všem jdete do vody, s něčím, v čem ležíte na břehu. Jakmile se jednou tento rozdíl zařídil, vyrostly šaty, ve kterých ležíte na písku, samozřejmě v modní záležitosti a poněvadž život a moře je takový, že kde kdo leží na písku od rána do západu slunce, a tak oblečený chodí, jí, pije, spí, čte, píše, má to i určitý smysl a oprávnění. Takový oblek pozůstává ze střevíců, které se oblékají naboso na hladké opálené nohy a červené kožené sandály jsou vlastně zde teprve úžasně hezké; ale i bílé, zelené, hnědé sandály jsou hezké. Z širokého slunečníku, který otevíráte nad vlastní hlavou, když chcete trochu stínu, nad knihou,

chcete-li číst, nad ruční prací atd. Ten slunečník je tím hezčí, čím více křičí, či ještě lépe, řve. V prudkém slunci, vedle prudké modře vody a nebe a prudké žluti písku nejen že nejkřiklavější barva je mírná, jako jehňátko, ale mírná barva bolí do očí, kdežto křiklavá lahodí.]

<sup>24</sup> Milena. *Ibid.*, str. 55. [原文 : Poslední roky rozkvetl sport a rozšířil se do všech vrstev. Proto každé jeho odvětví vytvořilo si pro sebe uniformu podle zákonů účelnosti. První plaveckou uniformou bylo černé triko a zůstalo jí doposud. Jenomže tato uniforma obohatila se několika nápady, na příklad moderní americká trička pozůstávají: z kalhotek a celkové sukénky a jsou přepásány pasem. Muži nosí právě taková trička a na plážích nerozeznáte chlapce od děvčete. Také se v poslední době rozmohla moda barevných triček a nevím, proč bychom je zavrhovali. Zelená, nebo chrpová, nebo modrá barva vypadají na opálené kůži výborně a znamenitě sluší pružným, vycvičeným svalům.]

<sup>25</sup> Milena. *Ibid.*, str. 57.

<sup>26</sup> Milena. *Ibid.*, str. 57.

<sup>27</sup> Milena. *Ibid.*, str. 57. [原文 : Daleko před nutností dobré výchovy stojí nutnost: býti osobou. To neznamená ty nebo ony vlastnosti, nýbrž to znamená: mít vůbec nějaké, ať jakékoli vlastnosti. Mít duševní tvář, mít vnitřní profil, být vlastnosti, nýbrž to znamená: mít vůbec nějaké, ať jakékoli vlastnosti. Mít duševní tvář, mít vnitřní profil, být samostatným, samostatně myslícím, volně se rozhodujícím a jednajícím člověkem, takový člověk přehodnotí si vždycky společenský katechismus podle své vlastní potřeby a jí špenát, třebaže ho jí právě tak jako druzí vychovaní lidé, přece jen jinak a skoro bych řekla: duchaplně. Forma je úžasná věc, je-li oduševnělá. Ale duše není tak úžasná, jak by se zdálo, nemá-li formy. Mít duši není tak těžké, jako ovládat svět formálně. Ale ovládat formu a to duchaplně a bez újmy, je právě ideál člověka.]

<sup>28</sup> Milena. *Ibid.*, str. 58. [原文 : Ale nesmysl není náhoda a tento smutně kapající deštník, vyprávějící o zničeném hedvábí a popraskaných lakýrkách, vypráví také o nelogickém myšlení člověka, který jej třímá nad hlavou. Vypráví o oklikách myšlení, kterými se tento člověk plete po světě, a o skocích, které provádí jeho rozum. Místo jednoduchého východiska: trvanlivé, pevné látky, vymyslel si člověk stěhovanou, kapající stříšku!]

**Milena Jesenská's Messages in Her Fashion Essays (I):  
By Comparing Her Fashion Essays, *Man Makes Clothes* (Člověk dělá šaty,  
1927) with Its Original Articles on Newspaper**

**Sachiko HANDA**

Milena Jesenská (1896-1944), a Czech Journalist who worked in the Czech Media between the Wars, is well known as an addressee of the romantic letters written by a Jewish German-language novelist, Franz Kafka (1883-1924). Because of Kafka's passion for her, her life has drawn more attention than her newspaper articles, which numbered over a thousand.

This paper examines the first 15 essays of her anthology, *Člověk dělá šaty* (*Man Makes Clothes*, 1927), which contains 33 essays, by comparing each with its original text published in the Czech newspaper, *Národní listy* from 1923 through 1926. Since there were differences between the essays and the newspaper articles, my study also analyses the changes that either or both of Milena, editor and technical reviewer made in her essays.

I argue in conclusion that Milena placed a great value on human body and mind instead of clothes, as the title of book, *Man Makes Clothes*, suggests. Especially in the first six essays, she dealt with body and mind alternately, which shows that she also laid weight on their balance. For Milena, fashion was not so important as a human being; it was just a useful medium for urging women to cultivate both of their body and mind.